

今年是国内最後の内戦「西南の役」が終結し、西郷隆盛が没して一四〇年の節目の年です。

今回はなぜ戦いが鹿児島で起きたのか、さらに西南の役と西郷隆盛の関係について紹介します。

明治政府と西郷隆盛

^{※1}戊辰戦争の勝利によって新政府の基礎は確立しましたが、幕府が滅んでも、全国の諸藩は依然として存続していました。中でも二六一あった藩の解体と藩主の処遇は最大の難問でした。

そこで、明治政府は戊辰戦争が終わり鹿児島に戻っていた西郷を藩主・島津忠義を介して職に復帰させ、この難事業に当たらせました。

明治政府は、近代的な中央集権国家を樹立することによって、初めて諸外国に対抗する力を持つことができるとして、明治四（一八七一）年七月に廃藩置県を行いました。二六一の藩が廃せられ、全国に三府三〇二県（明治四年末は三府七二県）となり、政府が任命した府知事・県知事が行政に当たる

こととなりました。

このような歴史的な大変革があっても、諸藩からの抵抗はほとんどありませんでした。その要因は、西郷が持つ人徳や彼が育てた強力な軍隊の存在もありましたが、江戸時代からの借財を新政府が肩代わりしてくれること、また藩主はその身分と生活が十分保障されることで、あえて異議を唱えることはありませんでした。

西郷隆盛と霧島

その⑦

「西南の役」と西郷隆盛

明治六（一八七二）年の政変

これまでの説では「西郷隆盛は征韓論に敗れ辞職して鹿児島に帰った」とされ、西郷は征韓、すなわち朝鮮国への武力行使を主張したとされています。しかし史料や書簡を見ると、西郷は強硬派を抑え、自らが使節として朝鮮国に赴き、事態の打開を図ることを主張しています。

これは、第一次長州征伐で山口県の岩国に乗り込んだときや、江戸城無血開城の際に幕臣・勝海舟と談判するな

ど、誠意を尽くせば事は成るという信念があったからではないでしょうか。

西郷を特使として朝鮮国に派遣することが閣議決定し、天皇の裁可も得ました。しかし大久保らによって無期延期となったことで、政府の要職を辞して鹿児島に帰りました。

皮肉なことに、明治政府は翌年の明治七（一八七四）年五月には台湾出兵に踏み切り、明治八（一八七五）年九

月には朝鮮国で^{※2}江華島事件を起こし、武力による外交を行っています。

私人を超えて

西郷は鹿児島で温泉や狩猟を楽しんでいましたが、一方では無職の士族が大勢おり、その処遇に心を痛めていました。そこで士族たちを指導・統率するため私学校を設立しました。漢学や洋学を教え、外国人教師も招き、優秀な学生は西欧に留学させました。

明治九（一八七六）年に廃刀令が公布され、全国で旧士族の反乱が起きま

したが、鹿児島では、西郷や私学校の幹部たちが動揺を抑え大事に至りませんでした。

しかし私学校学生らの反乱を恐れていた明治政府は鹿児島にあった武器や弾薬を大阪に移そうとします。この行動に、自分たちの武器が政府に盗られると怒った学生らは鹿児島市の草牟田にあった政府の火薬庫を襲撃しました。襲撃当時、西郷は大隅半島の根占で狩猟しており、その一報を聞いた西郷は「しもた」とつぶやいたといわれています。

さらには大警視^{※3}川路利良による私学校の潜入捜査が発覚し、尋問で潜入者が「西郷暗殺」の密命を受けていたことを供述したことから、緊張は一挙に高まりました。

この一連の事件が発端となり、西南の役に向かっていきます。しかしあえて西郷が反対を唱えなかったのは「明治の大変革」を起こした責任者の一人として、最後のけじめを取る思いだったのかもしれない。（文責 〓鈴）

※1 一八六八年から翌年に起きた、新政府軍と旧幕府軍との戦い。

※2 日本海軍が挑発して朝鮮国に砲撃させ、これを口実に武力で占領し強引に日朝修好条規を結んだ。

※3 鹿児島市出身。欧米の警察制度を導入。「日本警察の父」といわれる。